
BLOODY ROAD

梟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B L O O D Y R O A D

【Nコード】

N 6 4 2 3 B

【作者名】

梟

【あらすじ】

読書好きで、見た目も喋り方も女みたいな男柊麗は、二つの人格を持つ二重人格者だった。また、麗は国家容認の殺し屋でもあった。

― 1. 依頼 ―

「…もうすぐ…もうすぐ私の念願の計画が始まる。…クククク…ここまでするのに長かった…」

明かりは蠟燭だけという暗い、倉庫らしき場所に二人の人間がいる。一人は先ほど独り言を呟いていた男と、陣痛を起こしうめき声をあげている妊婦が一人。

窓には雨が打ち付けるように降っている。
ふと、突然白い光が辺りを強烈に照らす。

……オンギャーオンギャー

それは、雷の轟とともに産声をあげた。

∞

……ッハア……ッハア……ッハア……ッハア……

一人の男が木の陰に佇み息を整えている。

（……………ようやく逃げきれたか？）

そんなことを思いながら立ち上がり、辺りを見回す。

…人影は見当たらない。

男は安堵の息を吐き、ゆっくりと前へ歩きだす。…が直後、ビクツと体を震わし足が止まった。

背後に人の気配を感じながら、顔には怯えの表情が浮かんでいる。叫ぼうとしても声が出ない。体も動かない。これが本当の恐怖というものののだろうか。体温が急激に下がっていくような感覚を感じ、冷や汗が流れ出る。

それでも後ろにいる存在を確かめるために思い切って振り返る。

「……………っあああ…」

ザンツ…ブシュー…

支えを失った首が転がって行く。さっきまで首があったところから鮮血を噴き出しながら胴体が倒れる。

悲鳴をあげきる前にその男は絶命していた。

「…クツ…ククツ…クハハハハハハハハハ！」

そこには、人を殺すことに「喜び」を感じる“鬼”がいた。

…そこは図書館。時刻は午後5時。もうすぐ閉館するためか、人の気配が少ない。そこには受け付けの二人の他には二人しかいない。一方は資料コーナーで何かを探す男子学生に、もう一方の座って本を読んでいる人は女性に見える。

そこに男が一人、入口から入ってきた。その男は女性の方にむかって行く。

「よお、彦斎。相変わらず男にゃ見えねえな」

男はそう言っただけで前の椅子に座った。

「…あまりその名前で呼ばないでください。まだ直らないんですか？小松さん」

本を閉じ、顔を上げながら今まで女性だと思われていた男が答える。

「悪い悪い。だがよ、毎回名前が変わるんだ。いちいち覚えてらねーんよ。おまえみたいに天才じゃーねーんだ」

「それで、次の仕事は？」

「これだ」

そう言っただけで小松は少々分厚い封筒を彦斎に渡した。

「これが今回のリストだ。いつも通りやってくれよ。期待してっから」

彦斎は封筒の中身を確認する。

その光景をみていた小松は寒気が走った。彦斎の目が尋常でない輝きを放っている。

…………ズキン…………

「っっ！」

突如襲われた頭痛に彦斎は顔を歪め、もとの顔に戻る。

「おいおい、勘弁してくれよ。ここで仕事モード入られたら俺まで危ねーんだから」

「すいません。ついあいっつが出てきそうになりました。あつ、でも、もし出てきても小松さんは多分大丈夫ですよ。こいつの大好きな仕事を毎回持ってきてくれるんですからね。まあ、多少は危害が加わるかもしれないですけど」

「まったく、そういうこと笑顔で言うんじゃねーよ。おまえの顔じゃあなおさら不気味にみえちまう」

「そんなこと言わないでくださいよ。私も少し困ってますから」

「ハハハ。じゃあ頼んだぜ。そいつらの暗殺」

小松は立ち上がりながら小声でそう言った。

「そういうことは余り口に出さないでください」

「悪い悪い。最後に一言言わせてくれ。ナンパに気をつけろよ。クク、じゃあな」

男はそう言って図書館を立ち去った。

「…本当にそのことに困ってるのに」

彦斎はそう言って時間を確認する。

図書館の時計は18時を指していた。もう30分後には図書館が閉まる。

最後までこの本読みたかったのに、などと思いつつ本をあった場所に返し、図書館をあとにした。ここに次戻ってこれるのは来月になるな、とも考えながら。

彦斎は支度のために家に向かった。

― 1. 依頼 (2) ―

「お帰り、麗」

「ただいま、お父様」

家の中では『私』は本名で呼ばれる。ちなみに、苗字は柊ひいらぎである。もう一人の私は河上彦斎という名前を持っている。つまり、私は二重人格であ

り、二人共個々に名前を持っている。呼ぶほうとしてはかなりややこしいものがあるらしい。お父様である孜つとむ以外は必ず一度は間違える。呼ばれるほうとしてもしょっちゅう間違えられるので、正直苦勞くろうしている。（とは言っても本名を知ってる人は限られているんだけど）

「今回の依頼は？」

「ターゲットは、いずれも山口県在住。一人は経歴優秀、人望も厚く、正義感の強い佐柳進。国会議員志望で、日本のアメリカからの独立を最終目標にしている。優れた人材ではるが、これからの政界にこの思想が邪魔な存在になりかねないとのこと。二人目はある会社社長の息子、谷川一清。佐柳と親友との情報があり、こちらも政界の邪魔と判断。最後の二人は、金目的で五人を殺害した容疑で逮捕されたのだが、証拠不足を理由に釈放された元被告笹井卓夫と、こちらも金目的で証拠品を裏で工作し、笹井に手を貸した平野浩二検事。以上四人の殺害です」

「山口で四人か：時間にして一、二ヶ月ってところかな？ 毎回証拠を残さずやってのけるのは大変だろう」

「いいえ。そうでもありません。実行するのは私じゃありませんから」

「ハハハハ。確かにね。それじゃあ、もうそろそろ彦斎を呼び出そうか」

「お父様、ちょっと待ってください。彦斎を呼ぶ前に仕事の支度を

してしまわないと。あいつのことですから準備をめんどくさがってやらない可能性があります。あと、シャワーも浴びたいですし」
「そうだった。おまえの言う通りだな。支度をしてしまってから呼び出すことにしよう」

数十分後、支度を終え、シャワーもすまし、準備を全て終えた麗はある密室に移動し、そこにある椅子に座っていた。

「よし、始めるぞ」

「はい」

そう言うと、部屋の明かりが急に消え、その後、赤色の照明が点く。そしてさらに、鉄臭い臭いと一緒に白い煙りが充満してきた。

「おまえは——にいる——人殺し——が居場所——」

どうやら催眠術のようなものをかけている。

それに対し、麗は首に力がなくなったように、頭が前に垂れている。孜はそのまま言葉を続ける。

「——が娯楽で——鮮血が雨のように——」

数分後、麗は突然立ち上がり、目を開けた。いや、麗ではなく、他の人格が目覚ましていた。

「おはようございます。彦斎」

「ああ、おはよう。親父」

彦斎は背伸びをしながら言った。

「ふう。やっと自分の体に戻れたぜ」

「次の仕事の内容はわかってますね？」

「ああ。山口県で四人殺害だろ？ わかってるよ」

「くれぐれも内密に」

「いちいちうるせえな。今までもちゃんとやってきただろ？ 信用しろって。俺だって嬉しいんだぜ、人殺しがやれるんだ。正直、もっと沢山殺したいって思っているけどよ」

「だから毎回注意するんです。一応それ防止の手はうってあります

が」

「はー：それがなければ俺は自由なんだけどな。関係ないやつを殺したり、任務を終了し2時間たったりしたら麗の奴とすぐ交代しなければならなくなってるからな。俺が任務を放棄して時間を作っても、人を殺せなきゃいみがねえし、不便な体だぜ」

「私にとっては便利な体ですけどね。君の操作が簡単だ」

「ちっ。もし、俺が自由になるようなことがあったら、おまえを1番に殺してやる」

「どうぞ。その時は好きになさい」

孜は笑みを浮かべながら答えた。

「ちっ、不気味な野郎だぜ。そういえば、今回の任務には誰か来るのか？」

「ええ。田中新兵衛と一緒にやることになってます」

「げっ、新兵衛が来んのか？これじゃあ余り殺しが楽しめそうにないな。厄仕事だ」

「まあまあ、そう言わないで。じゃあ、仕事頑張って来て下さい」
そう言って、孜は準備した荷物を渡す。

「おっ、サンキュ。気が利くじゃん」

「お礼なら今君のなかに眠っている麗に言って下さい」

「あいつか。道理で気が利いてる。あいつが髪に気を使っているおかげで長い髪も邪魔にならねえし」

「どういうことですか？」

「髪が傷んでないおかげで髪処理が簡単なんだよ。結い上げるときとかな」

「なるほど。でも、君のことだから結い上げるのもめんどくさいのでは？いっそ、ショートまで切ってしまっただろうかと思うんだが」

「いや、切ることに關しては俺も麗も反対だ。気に入ってるんだ。結い上げるのをめんどくさいとは思わないんだ、これだけは」

「ほう、珍しいこともあるんですね」

「いちいちやかましい！カンに障ることばかり言いやがって。しま

いに本当に殺すぞ!」

「ククク。それじゃあ行ってらっしゃい」

「ああ。行ってくる」

彦齋は家を出た。

「…ククク。おまえが私を殺すことは叶わんよ。何せ、おまえが自由になるのは私が死んでからだからな。それにその時、彦齋と麗。どっちの人格が残っているかもわからんしな。クククク…」

月が分厚い雲に覆われ、外は漆黒の闇へと変わった。

― 1. 依頼 (3) ―

山口県のとあるカフェで一人、コーヒーを飲んで誰かを待っている人がいる。この人は長髪で小顔、そして美人である。足を組み、コーヒーを飲む姿は優雅である。男女問わずその姿には目を惹かれてしまう。

そこに一人の男が近づいていく。待ち合わせの相手だろう。男の特徴はまず、身長が大きいところがすぐ目に入る。顔は、少し老けてはいるが、生き生きとしている。どこことなく優しそうで、いざというときには頼りになりそうな印象を持つ。

男は待っていた男の前に座り、相手に話しかけた。

「よお。久しぶりだな、郷美」

「うん。久しぶり。弘介さん」

「じゃあ、予定の場所に行こうか」

「わかった」

そして二人は席を立ち、カフェをあとにした。

数時間後、誰もいない、廃墟と化した建物に二人はいた。

「おまえはいちいちめんどくせーよな。たまに任務を共にすると体が変わってるから、そのたびに待ち合わせをしなくちゃならねえし、偽名も新しく考えなくちゃならねえ。あの喋り方もぞわぞわする。」

新兵衛、それ、何人目だ？」

「覚えてねーよ。それより、今回の体もいいだろ？みてくれだけじゃなく、身体能力もそれなりにいいんだぜ」

カフェにいたときの二人とは到底思えない話し方で会話している。「おまえのコレクションなんかどうでもいいよ。それよりも、今回の任務俺は誰を殺したらいいんだ？うずうずしてんだ、さっきから」「ちっ、釣れねえ奴だぜ。おまえに殺してもらうのは、元容疑者の

笹井の野郎だ。ここに連れて来て脳死させてもらう」

「そいつだけか？ しかも殺し方も条件付き。やっぱりそういう展開か。だから、おまえとだけは任務やりたくないんだよ」

「文句言うな。誰のおかげで任務成功率100パーセントなのかわかってるだろう。殺す時に少々いたぶってもいいから我慢しろ」

「はいはい。わかりました」

「あとは情報収集のみだ。ターゲットの日頃の行動パターン、または、スケジュールがつかめれば任務成功は確実だ」

「OK。先に、笹井殺していい？」

「いいぞ。はなからそのつもりだったから、都合がいい」

数日後、彦斎が、さるぐつわを噛ませた笹井を連れて廃墟に帰還。

「捕まえて来たぜー。なんかしたごしらえでもするのか？」

「ああ。そいつに麻薬を打つ」

「はあ？ なんで？」

「そいつはここで死ぬことにはなるが、死体を有効活用させてもらう。そいつの死体にターゲットもう三人を殺させる」

「そういうことか。おまえが得意なあれを使うんだな。んで、そいつが殺された時、犯人が薬物中毒者なら動機不要だからな」

「そういうことだ」

「じゃあ早速麻薬挿入いたしますか」

「末期中毒者に見せるため大量に、また、最低でも二週間以上かけて打つとけよ。あと、殺したらそこにある装置をつけて植物状態にしとけ」

「わーってるよ」

そこには二人の話聞き、自分の末路を知ってしまった哀れな笹井がいた。顔が青ざめている。

「これから俺との地獄の時間がまってるぜ」

これからやろうとしていることに気持ちの高揚を抑え切れず、彦斎は知らず知らずのうちに笑みを零す。その顔が恐ろしく綺麗で、それ以上に不気味だった。

「下ごしらえ完了」

「よし、俺は第二の脳の調整にかかる。完成するまでの間に、ターゲットの行動パターンとスケジュールを調べておけ」

「OK。これが済んだら俺はもう任務完了ってことかな？情報収集終わったら帰っていいか？興ざめしちゃった」

「いいだろう」

そう言って、新兵衛はもう目覚めることのない笹井へ近づいていく。そして以蔵は、頭に切り込みを入れ、小さな機械らしき物を入れた。傷を縫合したうえで、さらに、細く、長い針のようなものを頭から、機械、そして、首の中枢神経に通るように刺した。

「さて、ここからが腕の見せ所だな」

新兵衛の手には、リモコンのようなものが握られていた。

十月三日午後11…00〇〇アパート1102室平野浩二宅

……ピンポン……

「だれかな？こんな時間に客とは」

テレビを見るのをやめ、ドアに向かい、覗き穴から外を見る。が、誰も見当たらない。

（私がここに来るのが遅かったせいで帰ったのかな？）

そう思い、一応確認しようとドアを開けた瞬間、

ザクッ：

心臓にナイフが深く刺さり、平野浩二は倒れた。
即死だった。

同日午後11…50△△ホテルパーティー会場

「今日はありがとう。久しぶりに羽を伸ばすことができたよ」

「俺もおまえと話ができて楽しかったよ、進。帰るのか？」

「ああ。また明日も仕事があるんだ。もう少しここに居たかったんだが、悪いね」

「仕事ならしょうがないさ。家まで送るよ」

「ありがとう。じゃあ頼むよ」

十月四日午前0…00駐車場

「あれが自慢の俺の車だ。1000万したんだ」

「流石だな。社長の御曹子ともなると。高級外車か……………」

「どうした？」

「奥のほうで人がうずくまってないか？」

「確かに。…早く助けてあげよう」

「大丈夫ですか？」

「む…胸が…苦しい…」

「カズ、携帯で救急車を」

「わかった」

一清は二人に背を向けて携帯をで電話をかける。

「もうすぐ助けがくるから大丈夫ですよ」

プルルル…プルルル…

「早く出てくれよ…」

——ぐっ——

一清はそのうめき声に反応して後をみた。

「どうした？ 苦しいか？」

…ドサツ…

進が倒れるのと消防署が電話にでるのは同時だった。

「進っ！」

『もしもし、こちら□□消防署ですがなにかありましたか？』

「あっ、あの、△△ホテル私有の駐車場まで救急車をお願いします。
警察も呼んで下さい」

要件を言い、電話をきり、警戒体制にはいる。

進は倒れたまま動かない。それに対しさっきまでうずくまっていた奴は、血に染まったナイフを片手に立ち上がった。

「畜生！ よくも進を！」

一清は笹井に殴り掛かった。しかし、あっさり受け流され、ナイフを肩に突き立てられる。その瞬間、一清はナイフを笹井から奪い取った。

（ナイフさえなければ殺させる可能性はグンと低くなる。あとは警察が来るまで辛抱すればいい）

一清はこう考えた。しかし、それは甘かった。

「ぐあっ！」

いつのまにか隠し持っていたナイフが両足に刺さっていた。そのまま一清は倒れ、その隙に隠し持っていた四本目のナイフで頸動脈を切られ、息を引き取った。

同日午前1…30 笹井卓夫宅

家にガソリンをばらまき火をつけ、笹井は焼身自殺を決行。

任務完了

― 2. 友達 ―

「ねえ」

「！」

「貴女の名前はなんですか？ いつもここで本読んでるけど」

突然だった。

麗は一つだけ熱中することが出来るものがある。

それが読書だ。

読書に時間を当てている時だけは、まわりの状況が把握出来ないほどに集中してしまう。安心して集中できる場所は、今、麗がいる図書館しかない。何故図書館で集中できるかというと、今まで話し掛けられることがなかったからだ。あの独特の雰囲気もいい。しかし、話しかけられてしまった。今、目の前にいる男に。じっとそいつの顔を見る。

「僕の顔に何かついていますか？」

「いいえ。特に何も」

麗はそう答え、読んでいた本を閉じ、その場から無言で立ち去った。

一人取り残された彼はしばらくの間ぼーっと突っ立っていた。

「：僕、なんか怒らせるようなこと言ったのかな？」

（次はあいつがいないときに来よう）

そんなことを考えながら、麗は家路を早足で歩いていった。

―次の日―

午前11時。図書館に人が集まり始める時間帯。

「……………」

麗は図書館の中を見回し、昨日話し掛けてきた男がいないことを確認する。

「……………」

再度確認し、やっと中に入る。いつものポジションをとり、いつものように本を読み始める。

…カチッ…カチッ…

午後2時。麗の他には受け付けの二人しかいなくなってしまうていた。

図書館に時計の時を刻む音が響き渡る。静かなだけあって一つ一つの音が大きく聞こえる。最初こそ昨日の男が来ないか注意をはらって本を読んでいた麗も、今はなんの音も聞こえていない。

…ギィィ…

図書館の入口にある扉は開く時に決まってこのような音を出す。よって、ここに誰かが入ってきたことを示す。しかし、麗は集中モードに入っているため当然気付かない。

「こんにちは。美人さん」

「！」

麗はまた驚いてしまった。こいつには会いたくない、と思っていたためにショックが大きい。またあの時と同じく、言葉もなくそいつの顔をじっとみる。すると、男がまた口を開き、

「実は、昨日のこと、謝りたくて」

と、こう言った。

今度は話の内容に少し驚く。まさか突然こんなことを言うてくるとは思わなかった。しかし、私は何か怒ったりしただろうか？とも考える。まあ、確かに読書の邪魔をされたことはストレスが少し増えたが、それよりも話し掛けられたことに衝撃をうけていたからそんなに気にしていない。

「昨日の、何を謝りたいの？」

次の瞬間にはこう喋ってしまっていた。

「え？怒ってないの？昨日の帰る時の態度を見て怒ってると思ったんだけど」

それでか、と一人納得する。

「本当に怒ってないの？」

「全然」

「…はあ、よかった。てっきりまた僕が知らず知らずのうちに何かをやらかしたのかと…」

「また？」

「はい。僕、昔から場の空気が読めなかったり、あと、ドジですから周りの人に迷惑をかけたりすることがしょっちゅうあって」

「ふーん」

「あの、昨日聞きそびれたんですけど、貴女の名前はなんですか？」
「……………」

また、突然だった。

本名は部外者には教えてはいけない、と孜からきつく言われている。今も一応は偽名を持っている。しかし、こいつは私がここに毎日のように来ることを知っている。だから、どちらの名前も教えら

れない。教えるのを断るのも一つの手ではあるが、麗自身、独特な雰囲気をもちだすこの男に興味を抱いていたため、断りたいと思えなかった。

「なんで私の名前を聞くの？」

「貴女と友達になってみたいから」

……友達……

友達とは何だろうか、いや、何だったろうか。
ふと、あの人の顔が頭をよぎる。

……あの日以来か……

麗は一人、回想に耽っていた。

……あれは、何年前だっただろうか……

「あー」

その一言に、麗は我に帰る。

「いっ、嫌なら、別に、そのー、名前、無理して教えてくれなくても大丈夫です」

「ねえ」

「はっ、はい」

「私の名前を知りたいなら、それなりの覚悟、必要だけど」

「どんな覚悟ですか？」

「…命を捨てる覚悟」

「！」

今度は彼が驚く番だった。まさか、友達になるために命を捨てる覚悟が必要だと言われると普通思うだろうか。しかし彼は、
(冗談だろうか？それとも……もしこれが本当なら、それがもとで

友達が少ないのかもしれない。もしそうのなら、友達になってあげたい！)

そう思った瞬間こう口走ってしまっていた。

「じゃあ、今ここで命を捨てたことにします」

麗は呆氣にとられた。そして、

「…ふふっ…」

「え？」

「ふふふふっ」

「なっ、何がおかしいんですか！僕は真面目にいつているんですよ！」

「だから笑っちゃったの」

「…もう。冗談なんだか本当なんだか…」

「いいよ。私の名前教えてあげる」

「本当！」

「ええ。でもその前に、貴方の名前を教えてください」

「はい。僕の名前は薬袋^{みない}惇と言います」

「私は麗って言います。苗字はまだ教えられませんが、以後よろしくね」

「よろしく、です」

「…ふふっ…」

「なんでまた笑うんですか！」

「ふふふふっ」

あー、何だろうこの感じ。なんか、とても懐かしい。いったい何年ぶりだろう。

——私、今、笑ってる——

今、心から笑っていることをまた、しっかりと噛み締める。そして、楽しいということはこういうことだったんだ、と思い出す。少しの間になるかもしれないけれども、口下手で、自称、ドジで場の空気が読めない、という彼と、その間友達でいようと思う。もし、彼の命が危険にさらされたら、今度こそ友達を助けようと思う。

——今度こそ——

あれからまた読書を始め、気がつくと午後5時になっていた。

「私、もう帰るね」

「えっ？…あー、もうこんな時間か」

麗は、読んでいた本を持ち、出口へ向かう。扉を開けようと手を伸ばした時、用事を思い出したように立ち止まり、言った。

「一つ、言い忘れたことがあります」

「えっ？何を？」

「私、男ですよ」

「……………ええっ！」

「ふふふ。さようなら！」

驚いている彼を残し、麗はその場から立ち去った。

― 3. 戦地 ―

今、俺はある戦場に来ている。つい先日、とうとうイラクが、全世界に宣戦布告をした。つまり、ある戦場とはイラクのことだ。

何故俺、彦斎がここにいるかというと、日本政府から要請がきた。武力がない今の日本に、戦闘に加われ、との命令が世界政府から出されたのが理由だ。

世界政府が日本にこんな無理な命令をしたかというところ、俺達『殺し屋』の存在を知っていたからだ。そして、俺達の実力も把握したうえで求めている。

俺達の存在は全世界、トップレベルの人しか知らない。

つまり俺達は全世界の多大な機密事項の一つなのである。そしてこのことは、世界政府容認の殺し屋ということも指している。恐ろしい世の中になったもんだ、とつくづく思う。

当然、日本に出された命令など、国民は知るよしもない。

俺達の内部は日本政府でさえ把握出来てない。全てを我が糸を引いているためだ。

先程も言ったが、実力だけはちゃんと響き渡っている。俺達は四人揃えば国家戦闘クラス位置する。自分で言うのも変な感じがするが、人型核兵器みたいなものだ。

もう二週間前にもなるが今回の任務は重大なため、何年かぶりに柊家に四人全員集合した。

「久しぶりですね。みなさん全員が集まるのは」
孜はこう言って四人の顔を見渡す。

「田中新兵衛、その体は何年ぶりですか？」

「三年ぶりだなあ。錆び付いてなくてよかったぜ」

「それはなによりです。さて、みなさん。今回の任務を説明します。
まず、彦斎」

「おう」

「貴方は中央病院の破壊および、そこにいる全ての医者抹殺です」
「OK」

「新兵衛、半次郎、以蔵はA、D、E地点の防衛線の突発が任務です。これが軍部から送られてきた詳細な地図になります。それでは健闘を祈ります」

∞

彦斎は不満を抱いていた。ほかの四人は存分に暴れられるというのに、何故俺だけこんな任務なのかと。

「畜生！あいつらがうらやましいぜ」

つい愚痴が零れる。

身軽さや見た目、いろんなことを総合し彦斎が適任とのことで、故意にいじわるをしようとして選ばれた訳ではない、ということはわかってはいるのだが…。

「医者全員いたぶってから殺してやる」

しかし、敵陣のど真ん中に病院はあり、いたぶっている時間がな
いことは重々承知である。だから頭でできるかぎりリアルに想像し
た。医者一人一人が逃げ惑い、死の恐怖に怯え、顔をひきつりなが
ら俺に殺される様子を…。

その後、病院へ入る準備の確認をした。

服装は邪魔にならない程度にボロボロで、かなり汚れている。汚れているのは服だけに留まらず、顔や手まで泥がついたようになっている。

彦斎はそんな自分を鏡で見て、最後に青酸カリと爆弾を持っているか再確認。

「よし。準備完了」

深夜、イラク兵は隊のいる場所を悟られないようになるべく明かりを消す。そのため外は漆黒の闇と化す。その時間帯を狙い、病院に潜入。通気孔を通り、いたるところに爆弾を設置する。

爆破ポイントに爆弾を設置し終え、次に食糧庫に移動。そこにある食糧全てに青酸カリをふりかける。

「ふう。下準備完了。もし見つかった時のために難民に変装していたが、見つからないですんだな」

そんなことを呟き、病院から脱出。

病院は、軍が食事やら行動やら全てにおいて厳しく管理している。朝食は医者、看護師、患者一緒に食べ始めるため、ほぼばれずにみんな青酸カリが入っている食べ物をお口にする。その後の騒ぎを合図に爆破すればほぼ確実に全員死ぬ。それでも生きていた医者がいた場合は遠くからスナイパーライフルで撃ち殺す寸法。これで任務はほぼ完了する。

「あいつら、今頃楽しんでるんだろうな…」

一息つきながら彦斎はこう呟いた。

—イラク軍本部・会議室—

……ガチャ……

会議室のドアが開き、威厳がありそうな男が胸に勲章らしきものをじゃらじゃらつけて入ってきた。

『起立っ！敬礼！直れ！』

『うむ。座ってよろしい。それでは、これから作戦会議を始める』
どうやらイラク軍の最高司令官らしかった。1番綺麗なソファに座り、机に乗り出した。その直後、乱暴にドアを開け、息を切らしたイラク兵が入って来た。

『しっ、失礼します！緊急事態です！』

『騒がしいぞ。ノックくらいしろ』

『もっ、申し訳ありません』

『それで、用件はなんだ。緊急事態とか言っていたな』

『はっ！ご報告いたします！我が軍の最重要防衛線の三ヶ所が計三人の敵と寝返り兵多数に襲撃され、うち、二カ所壊滅いたしました！もう一カ所も時間の問題かと…』

『何だと！？あそこがそんなに簡単に崩れるわけがなからう！しかもたった三人に…冗談も大概にしろ！』

『いいえ、これは紛れも無い事実です！現に、各部隊の多数の負傷者が中央病院に向かっています』

『そ…そんな馬鹿なことが…』

……ドドーン……

地響きと共に会議室に爆発音が響き渡る。

『今度は何だ…！』

『緊急！緊急！中央病院が何者かによって爆破されました！生存者は無しの模様！』

『畜生！一体どうなっていやがるんだ！』

――D地点――

「よお、以蔵。手伝いに来たぞ」

「…半次郎……」

「ちえっ、相変わらず無愛想なやつだねえ。ところで、おまえは任務を終わらせるのに時間がかかりすぎでないか？」

「任務終了時間まではまだ3時間残っている」

「焦っても悪い結果が出るだけだ、ってか？ いちいち堅いやつだな」
かなりの数の銃弾が飛び交う中、平然とこのような会話をする。

「まあ、勝手に手伝いさせてもらうよう。そのせいで人を殺す量が減ったとかで恨むなよ」

そう言うと、半次郎は地に異常に大きな右手を当て叫んだ。

「燃えろ！」

……ア、アアア……ギヤアアア……

至る所からいきなり火の手が上がった。発火元は…

――人間――

「あちゃー。やっぱり遠くからだと少し威力が弱いね。即死させてあげられなくてごめんよ」

数十分後、D地点は壊滅した。

― 4. 野次馬 ―

…キンコンカンコン…

授業終了の合図が鳴る。

「はいっ！今日の授業はこれまでっ！」

「起立、礼、着席」

号令の直後、クラスに騒がしさが戻る。そのなかで少し大きなグループが一カ

所できている。そのグループの中心となっているのは：

「淳！おめー、さっさと白状しろよ！これできたんだろ？」

そう言った男子Aが小指を立ててみせる。

「なんの話だよ。僕には彼女はいないって」

「とぼけるな！俺様の情報網をなめるなよ！おまえが綺麗なねーちやんと図書館

で仲良く話をしてるところを見たってやつがいるんだよ！」

嘘ーっ、とか、マジでーっ？とか色々な言葉が飛び交う。男子Bはこの情報を

みんなに伝え、いかにも得意げだ。

この発言に僕、葉袋淳はかなり困った。もともと言い訳を考えるのは得意じゃ

ない。本当に『彼』は僕の彼女じゃない。証明も簡単だ。だが、証明するため

は実際に麗に会ってもらうしかない、というところが問題なのだ。麗は友達を凶

書館に連れてきても許してくれるだろうか？否、許してくれないだろう。一か八

か、事実を一つ喋ることにした。

「あの人の性別は男です。これでも信じられませんか？」

一瞬静まり返り、なんだよー、とか、つまんねー、とかみんなが言い始め、散

り散りになりそうになったとき、男子Bが急に笑い出した。

「ハハハハハハ！ どんだけ下手な嘘だよ！ あんな美人で男子のわけねーじゃん！」

」

「何だよ。まるで君が見たことあるみたいな言い方じゃないか」

「ああ。見たよ。俺自身がな」

「さっき他の人から聞いたって…」

「言ってねーよ。俺は『仲良く話しているところを見たってやつがいる』って言ったただだよ」

「………」

思っていたとおり、この発言は簡単に信用性を失い、自分をもつと苦しい立場に追いやってしまった。

「どうすれば信じてくれるんですか？」

「身分証明書みたいなものを俺らに見せるか、会わせてもらってじかに確認する

、のどちらかだな」

「じゃあ、彼に君と会っても大丈夫が聞いてみるよ」

「へっ。彼、か。諦めが悪いな。どうせ会わせてもらえないのがわかってる。いい加減喋っちまえよ」

「今日はあと帰らなきゃ」

「淳、逃げるのかよ？」

「どうせ明日も学校来なきゃいけないし、逃げる意味ないでしょ？ じゃね。」

淳は立ち上がる時に躓き、豪快に転んだ。腰の打った場所をこすりながら教室をあとにした。

「あいつやっぱドジだな」

― 4. 野次馬 (2) ―

「イテテテ」

図書館に行くまでの間、ずっと腰をさすりながら歩く。正面から見ると若々しい高校生であるが、後ろから見ていると老いた爺さんに見える。

「なんであそこで転ぶかな」

自分がドジであることは重々承知している。だが、やっぱり直せない。だからドジなんだろうけど…。

「イテッ！」

俯いたまま歩いていたため電柱に気付かずにつかってしまった。今度は額をさすりながら歩く。

「俺かっこわり」

そんなことを言いながら顔を上げる。いつの間にか図書館に着いていたようだ。

……ギイイイ……

入口から顔を出し、麗がいるか確認する。

(今日も来ていないな)

麗は、一ヶ月半前から全然来ていない。

「私が二日連続で図書館に来ないようなことが続いたら、しばらくここに来ることはないから」 って聞いていたからあまり心配はしていない。心配はするべきであると思うのだが、どこか抜けている淳はそこまで深く考えていなかった。

「雄呂血の続きを読もうかな」

分厚い一冊の文庫をスクールバックから取り出す。上下巻に別れているのもあるが、淳のは一冊にまとめられているバージョンだ。余り有名でないと思う作品ではあるが、お気に入りの一冊だ。

ふと、ガラスごしに外を見る。

「……!!」

男子Bがすぐそこに迫っていた。なんつー神経してるんだろうと思いつつにそいつに一瞥をくれてやる。それに対し男子Bは勝ち誇ったような表情を浮かべながら図書館に入って来た。

「カッカッカッ！先手必勝ってやつだわな。もう逃げ場はねえぞ！
淳！」

「先手必勝もなにも、今日は彼は来ないよ」

「………はあ？」

「今日だけじゃなく、多分もうしばらく来ない」

「かーっ、これじゃあ骨折り損のくたびれ儲けだな。もう少し情報集めてから実行するんだった」

「ご苦労さん」

「……まあ、そのことが本当ならな」

「………はあ。なんで信じてくれないんですか？」

「しょうがないだろう？おまえが口をわらない限り俺は諦めないし、それに対しおまえは自分に都合がよくなるように嘘を言う可能性は必ず出てくる」

「だけど僕が言ったことが本当だったとしたら？」

「今日は来ないにしろ、これからの数日間おまえに彼女がここに来る可能性はあるわけだ。実際、俺に彼女がここに来ない、って言った時おまえ自身“多分”ってつけて言ったからな」

「多分君、探偵業や情報屋がむいてると思うよ」

「お褒めの言葉ありがとうございます」

「んで、君は何してるの？待ってる間。僕は当然ながら読書だけど」

「俺も読書するよ。場所も場所だしな」

「へー、本読むんだー。知らなかったよー」

「なんだその言い方。喧嘩売ってんのか？」

「別にー。つい本音が出ただけだよー」

「それが喧嘩売ってるって言ってるんだ！」

「あまり大声だと周りに迷惑だよ。ここ図書館だしね」

「……………」

……ギィィィ……

二人とも音のした方向を見る。…麗が入ってきた。

「来たじゃん！この嘘つき！いやー、粘った甲斐があった」

「嘘はついてないよ。素で来ないと思っていたもん」

「淳……この人……誰？」

「こいつは……」

「俺っ、石嶋昶へイシジマアキラって言うっす。こいつのクラスメートです」

「兼、命知らずの情報屋」

「……ふーん。だから昶君は淳についてきたって訳なんだ」

「質問！なんで俺が勝手についてきたってわかった？」

「淳の顔を見れば一目瞭然でしょう」

「そういうことか。納得納得」

「さっき淳が言ってたけど、命知らずってどういうこと？」

「まあ、そうなのかもね。知りたい、と思ったことにはどんな危険を省みず突き進むところがあるってことは自覚してるし」

「こいつの言ってることは本当だよ。犯罪まがいのこともしてるしね」

「私の秘密を知りたいのならそれ相応の覚悟が必要だけど？情報屋で無理矢理淳についてきたってことは私についてでしょう。まあ、聞きたいことにもよるけどね」

「じゃあ、単刀直入に。あなたは淳の彼女ですよね！」

麗は目を少し大きく開き、驚いたような顔をした。

「私は男です。淳から聞きませんでしたか？」

「ぬなっ！？あなたまでそんなこと言うんですか？」

「だから言ったじゃん」

「ええいっ！こうなったら強引に確認だー！」

ガシッ

「えっ？」

バコッ

「グオッ！」

「あー……綺麗に入ったなー」

ドサッ

昶が麗の胸をわしづかみにし、麗が昶の顔を掌打し、それを淳が
実況し、昶は見事にノックダウンした。

― 4. 野次馬 (3) ―

「いてえー」

「ったく、昶のせいだぞ！ 図書館で怒られたの」

正しくは受け付けの人に軽く注意されただけだが、あの図書館をよく利用する僕と麗にとってはとても効くものだった。

僕たちはこれ以上図書館にいるともっと迷惑がかかると判断し、滅多に人がいることがない公園にいた。

「んなこと言っただけ。信じられるかよ。こんな美人で男だなんて」

「その気持ちはわかるけどなあ」

「男が胸に触られたくらいで殴るかよフツ」

「それはごめんなさい。どうしてか反射的に、その、手が出たというか……」

困ったように麗は昶に謝る。

「……麗は悪くないよ。昶が突然変な行為に及ぶからいけないんだって」

「へえ。彼、麗って名前なんだ」

「ん？ なんで知ってるの？」

「なんでって、いましがたおまえが喋ったばかりじゃん」

「……またやってしまった……」

「ばーか。おまえが嘘や隠し事するのは無理だって」

「うるさい。馬鹿はよけ……」

「馬鹿。昶の言う通りよ。名前を勝手にしゃべるなんて！」

「……ごめんなさい」

「あと、昶は、私のことについて絶対に漏らさないこと」

「んなこと言っただけ、情報屋って言われているとおり、相手の知りたいことを売ってのが俺のやり方だし」

麗は、人が周りにいないことを確認し、

…チャキ…

どこから出したのか、一瞬の間に昶の喉元にナイフを突き付けていた。

「もし他人事にしたらあなたの命がないものだと思って。その情報を知った者も全員同じだから」

昶は最初冗談か何かと思ったが、冷徹そのものに徹していた麗の目を見て、本気だと悟った。この状況に驚いた淳はオロオロしている。

「……………わかったよ」

「ふふっ。いい子ね」

「いい子ね、つたってどうみても俺達と同じくらいの年齢にしか見えないが？」

「それもそうね。私は17だけど、あなたたちは？」

このやり取りで安心した淳が先に答える。

「僕17」

「俺18…ってことは俺のほうが年上じゃねえか！」

「でも、どうせ数カ月の差でしょ？そんなに私と変わらないじゃないかい」

「だからおかしいんだって！…あー、突っ込むの疲れてきた」

「じゃあ、やめれば？」

「……………ああ。そうする」

「私、そろそろ帰るね」

「オーケー。じゃ、俺も帰る」

「僕も。じゃあ、また明日」

そう言って、三人はベンチを立った。

「おはよう。昶」

「あー、おはよう」

朝、登校してくる生徒でいっぱい玄関で、淳と昶の二人はいた。そのまま一緒に教室に向かって行く。

「昨日の話、どうするんだ？どうやって昨日の騒ぎを鎮める？」

「ああ、あれか。任せとけ。簡単だ」

教室に着き、朝のホームルームが始まるまでの間、数人、二人の前に昨日の話について聞きに来た人がいたが、昶が、後ほど重大発表するから次の休み時間にまとまって来い、とだけ言ってみんなを追返した。

「重大発表ってなんだよ。なんか不安になってくるじゃないか」

「任せとけて」

昶が宣言した影響で朝に聞きに来た人の他にも沢山の生徒が集まった。

「諸君。よく集まってくれた。昨日の〈淳に彼女がいる〉疑惑についてだが……この件はなかったことにしてくれ」

集まったみんなは期待していた言葉を聞けず、それどころか、この件を忘れてくれ、との宣言に疑問と落胆の発言が多く挙がった。それに答えるように昶がまた喋りだした。

「理由は言えないが、これから俺と淳のどちらにもその話をしないこと。噂もしない。尾行もしない。この件に対する一切の行動を禁止する。もしそのようなことを行った場合には……」

その場にいる全員が息を飲む。

「そいつの秘密を赤裸々に公表してやろう。おっと、ここに、自分の秘密を知られているはずがない、とか、自分には秘密などない、などと高をくくっているやつは後々痛い目見るぜ」

直後、そこで話を聞いていた生徒は全員、この件への関与を一切しないと心に決めた。そして、そそくさと立ち去っていった。

「任せとけて、こういうことだったのね」

「これでよかったろ？もうこの話は闇に屠られたのとおんなじだ」
昶は得意げに、ニッと笑ってみせた。

― 5. 死に神 ―

『麗、いつまで奴らとつるむ気だ?』

『なるべくずつとよ』

『気をつけな。最近孜がおまえの異変に気付いていきてる。もうそろそろ、おまえの異変の原因を探り始めるぞ』

『そうね。小動物にも気を配らなきゃ』

『上手くやりすごさねえと、六年前の繰り返しだぜ』

『……あの時の二の舞は絶対にしない。今は力がある。絶対に淳達を殺させはしない』

『……力になるぜ、ブラザー』

『ありがとう』

∞

「お帰り。麗」

「ただいま。お父様」

いつもと同じやり取りをし、麗は家に入る。すると、孜が唐突に麗に問い掛けてきた。

「麗、あなたは私に隠し事をしているね?」

「……なんのことでしょう」

「最近君の様子がいつもと違う感じがしてね。まさか友達なんて作ってないだろうね」

「……作る訳無いでしょう。私は…あんな思い二度としたくない」

「その言葉が真実であることを願いますよ。……ところで、今回の仕事の内容、聞いていますか?」

「いいえ、お父様」

「それでは私から説明しましょう。最近イギリスに属に死に神と呼ばれている殺人鬼が出没してることを知っていますか？」

「いいえ。読書にばかり打ち込んでるので最近の世界事情には疎いので。しかし、どうしてそのような呼び名が？」

「武器が身の丈ほどもある大鎌なんですよ。それでもって無差別の殺人を毎夜繰り返しているそうなのですよ」

「ということは、その死に神の抹殺が今回の任務なのですか？」

「依頼にはそう書いておりますが、違いますよ。我々の今回の目的はその死に神を仲間に取り入れること。つまり、あなたの任務は死に神の確保です」

「わかりました」

「これを渡しておきましょう」

そう言って五つ、錠剤を麗に手渡した。いつからか海外の仕事ではこの錠剤を渡されるのが常となっている。

『その薬は飲んだ直後から約5時間彦斎と意識を交換できる薬です』
こんな説明を数年前に聞いた。

「流石に五つは多いかもしれませんが、まあ、念のためということ
で」

「はい。わかりました。標的の特徴は？」

「問題はそこです。大きな鎌を扱うとしか情報は来ていないんですよ。実はその情報の提供者はそれから逃げている最中に電話を警察にかけ、鎌のことを言った直後に殺されたらしいです。ただし、活動時間はほとんどが夜らしいので、夜歩きでもしていたらいずれ会えるでしょう」

「わかりました。武器は？」

「あなたがイギリスに着いたら送ります。では、頼みましたよ」

夏が過ぎ、秋の中頃にいる今日この頃。イギリスの首都ロンドンから少し離れた高原地帯。空気が冷たくなった影響により、大自然の紅葉が繰り広げられている。

……綺麗だなあ……

石垣の上でそんなことを思いながら紅葉を眺める十五歳から十六歳くらいの女子が一人。髪はショートカットで輝くような金髪。容姿も整っていて美人というよりは可愛い。しかし、何故か日本人似の顔である。そして、なにより特徴的なのは、二色の目を持っていることである。右目が、吸い込まれそうな漆黒に対し、左目は、空のように透き通った青色である。

日が落ちて来て風景がいつそう赤に染まる。もうすぐ夜になるだろう。するとその少女は立ち上がり、ロンドンに向けて歩きだした。

「今日もマン・ハントしなくちゃ。準備しにかーえろっと」

薄暗い空に白い三日月が昇っていた。

― 5. 死に神 (2) ―

私は今、ロンドンにいる。ここが殺戮という名の悲劇の舞台となっている。しかし、例の死に神が夜行性のためか、日が出ている今の時間帯は人が多い。

「号外っ！号外だよー！」

一人の男が新聞をばらまき、そう大声で言いながら走って来た。そこにいる市民は皆そちらに目を向ける。

「なんとあの死に神が賞金首になったよー！賞金は、なんと三万ユーロだよー！写真などの情報も千ユーロの賞金を貰えるよー！」

そのようなことを叫びながら男は走り去って行った。

「これは予定外。お父様に連絡しなければ」

麗は小声でこう呟き、今日泊まるホテルへと向かっていった。

…プルルルル…プルル…ガチャ

「もしもし。お父様？こちら麗です」

「どうした？武器のことなら到着は明日の昼になるが、他に何か？」

「例の死に神が生死問わずで指名手配されました。賞金もかかっています」

「…：…思っていたよりも警察の動きが早いな。まあ、実力を判断するにはいいイベントだろう。もし、本当にもしもの場合だが、見込みが無かったら殺して賞金を貰ってきなさい。他には？」

「これで以上です。それでは」

ガチャ

電話を切り、麗は窓越しに空を見上げる。そこには一番星が瞬いていた。

「淳たち大丈夫かな」

∞

…カツカツカツカツ…

夜、例の事件で人通りが全くない街道。闇を照らすための街頭を青に変え、その結果犯罪の数か激減した。街頭の色を変えるだけでこのような結果になるとは誰も思わなかったろう。また、その逆もつまり、このような事件がまたもや起き、その恐怖に怯えながら暮らすということも考えていなかったであろう。

…カツカツカツカツ…

誰もいない街道では一つ一つの音がとても大きく聞こえる。男は自分の足音や呼吸を聞き、そのようなことを考えていた。

（奴は…奴はどこにいる……！）

しかし、人がいる気配はない。男は念のため自分を中心に周り360度を確認する。…やはり誰もいない。

（誰からも見られない場所じゃないと出てこないってことなのか？）
その説へ考えを改め、足を心当たりのある場所へ向ける。…そこはあらゆる建物に背中を向けられた空き地であった。他にもそういう場所はある。何故かは知らないが、頭のどこかで、ここだ、ここに間違いない！と言っている。

男は今までよりも神経をぐっと研ぎ澄ませる。野性の勘というものだろうか、ここは間違いなく危険だ、と体中から信号が送られて

くる。…その原因はすぐにわかった。

（鉄の臭い？）

鼻をよく効かせる。はつきりと鉄の臭いがした。男はその臭いの強い場所へ向かって歩いて行く。その空き地に一つしかない街灯の、陰の部分にそれはあった。

「…うっ……」

肩から腹にかけて両断されている死体が、そこに横たわっていた。いまだに血が流れているところを見ると、まだ死体は新しい。

「おじさん。何してるの？」

「！！」

死体に気を取られていたため、人が近づいて来たのに気が付かず、男は仰天し、危うく腕に抱えていた散弾銃を発砲させるところだった。

「……なんだ、ガキかよ」

そこに立っていたのは金髪の二色の目を持った少女だった。

「ガキとは失礼な！？私これでも16歳です」

「十分ガキじゃねえか。おまえはこんな時間に何してやがる」

「まず、そっちから答えて下さい。最初に聞いたの私ですから」

「……わかったよ。俺は例の死に神を捕まえに来た」

「捕まえに？」

「ああ。俺は殺そうとは思ってねえよ。やむを得ない時はこいつで殺すことになるけどな。なるべく殺したくねえんだよ」

「へえ。なんで死に神を捕まえに？」

「ダチの保証人になっちまったがために莫大な借金を抱えちゃった。だからな、この命を賭すことにしたんだ。借金に追われて暮らしても生きてる心地がしないからな。捕まえて楽になるもよし、死んで楽になるもよし。そう思ってここに来た」

「おじさん、家族いないの？」

「ああ。親はもう年で死んじゃったし、俺は幸い独身だ。おかげで気が楽つてもんだ。さあ、こんどはおまえさんが答える番だ。一体こんな時間になにしてる」

「エヘヘ。散歩」

「こんな夜中に女子一人で散歩！？おまえなあ、死に神もうろついているってのに危ねえじゃねえか」

「ねえねえ、死に神を捕まえる時のやむを得ない時ってどんな時？」

「俺の要求に応じず、危害を加えてきた時だな」

「へえ。犯罪や人を殺した経験は？」

「無い」

「ふーん……私、死に神知ってるよ」

「は？今、なんて……」

「呼んできてあげるね」

「おいっ、ちよっと待てっ！」

呼び掛けも虚しく、その少女はいなくなった。男は再び死体に目を向ける。

（俺もこのようになるのだろうか……）

そのようなことを考え、少女の言ったことも本当なのか、とも考えながら少女を待つ。

「お待たせ」

「……！！」

そこにいたのはあの少女一人だけ。しかし、さっきとは様子が違う。身の丈程もある大きな両刃の鎌を持っている。刃の部分は装飾されていて何かの芸術品みたいだ。柄の先からは細い鎖が長々と付いていて、全てが腕に巻かれている。そして柄も刃も鎖も全て銀色で統一されている。

「おいおい、おまえ、それ冗談だろう」

「いいえ。私の顔を見ればわかるでしょう」

「…………俺の要求に答えてくれるか？」

「愚問です。今まで罪の無い人を容赦なく殺してきたんです。今更

情にほだされるなんてことはあるはずが無いでしょう」

……ガチャ……

男は少女に向けて銃を構える。

「大人しく捕まってくれないか？ でねえとおまえを撃つことに……」

「なら、さっさと撃ってちょうだい」

「なっ……！！」

「でないと私はあなたを殺しにかかりますよ」

少女はニツと笑う。それに対して男は銃を少女に向けたまま動かない。

「あなたは私を撃てない。そうでしょう？ 今まで人を殺したり、ましてや軽い罪さえも犯したことの無いあなたに私は殺せない」

「……ほお。そこまで言うとは、度胸が座っているね、お嬢ちゃん。だが、俺は甘く無い。なんならここでおまえの頭をぶち抜いてやろうか？」

「……ふっ……アハハハハハハ！」

「なっ、何が可笑しい！」

「だって……さっきまで……その死体……私が殺した奴見て……ビビっていたじゃない！」

「……………」

「いいわ。じゃあ証明してちょうだい。あなたが私を殺せるってことを。ほら、さっさと撃ちなさいよ！」

「おう、やってやろうじゃないか！」

そう言って男は散弾銃の引き金をこめる。……が、いくら待っても引き金を引けない。仕舞いには散弾銃を持つ手が震えてきた。それをみた見た少女は高らかに笑った。

「ほーら、撃てないでしょう？ さっき私と話をしたせいで親近感みたいなのを抱いていたってこともあるだろうけどね、あなたには決定的に足りないものがあるのよ」

「……………」

「覚悟よ」

「なっ……」

「あなたは覚悟はしてきたと思っていたらしいけど、違うのよ。確かにあなたは自分の命を捨てる覚悟はしてきたのかもしれない。じやあ何足りないかって？…人を殺す覚悟よ」

「！！」

「私は両方覚悟してるからこんなこと出来る。だからあなたにこんなことも出来る」

そう言っって少女は鎌を男に向けて振る。それを男は慌ててよけ、後ずさる。首からツィ、と血が流れる。

「あなたは何も出来ない弱虫なの。あなたは私を撃つことが出来ない。つまり、殺すことが出来ない。生け捕ることも出来ない。その場合、死んだほうがましって言ってたよね。なら、私の鎌で一思いに殺してあげる。…さようなら」

「うっ、うわああああ！」

男は引き金を……引いた。

ドンドンドンドンドン

「……はあっ……はあっ……はあっ……」

銃を乱射した場所に少女は……いなかった。直後、上から声が降ってきた。

「気が動転しちゃったら当たる弾も当たらないよ」

男の頭上に飛んでいた死に神は大きく鎌を振りかぶった。

「バイバイ。」

……ズバン……ブシュッ……

男の首が落ちた。切り口からは一瞬血が噴水のように勢いよく噴

き出し、すぐに流れるような形に変わった。

「さよなら。おじさん」

月明かりに照らされ、血糊がついた鎌が、美しい銀色に輝いていた。

― 5. DEATH (3) ―

そこはいつもの図書館。とても小さい踏み台に上って淳は一番上の段にある本をとろうと格闘している。

「おっとっと」

あと少しというところでバランスを崩し転びそうになる。

「ふー。危ない危ない」

淳はまた目当ての本に手を伸ばす。

（麗は何故あんなことを言ったのだろう）

「これからしばらくの間、私に関する言動は控えて。特に私がいな
い間は」

「はあ。わかったけど、どうして？」

「私に関してのスパイみたいな者が最近動きはじめたの。だから。

これは昶にも伝えて。くれぐれも人がいないからって喋っては駄目。
何時でも何処でもね」

「はあ。わかった」

「何時でも何処でも、だからね」

（何時でも何処でも、かあ。そこが引っ掛かるんだよな）

そんなことを考えていたら目当ての本に手が届いた。

「おっ、やったー！」

淳はここぞとばかりに手に力を込め、おもいきり後ろに手を引いた。が、それが失敗だった。

「うわあっ！」

バランスを大きく崩したのに気付き、両手を鳥のように羽ばたかせたが、その甲斐なく後ろに派手に転んでしまった。そして、追い撃ちをかけるように、勢いをつけて抜いた一番上の段の本が渾にむけて落ちてきた。

「なんで僕はっかこんな目に！」

∞

……ガシャガシャガシャ

大きな段ボールの中身を乱暴に放り出した。中には拳銃が二丁と銃弾が数箱。そして、日本刀が一本入っていた。

「確保には十分な装備ね」

麗はそう言ってテレビを点ける。

『……日また新しく死者が二人出ました。どちらも地域では名の通ったガンマンで出身国は……』

あれから二週間。誰ひとりとして死に神を仕留められなかった。それだけではない。誰ひとりとして生きて戻っては来なかった。

現場には被害者以外の血痕は認められなかったらしい。こう何度狙われているのに毎夜こりずに出てくるところをみると、死に神は実力の半分も出していないだろう。仲間に引き込むには十分な理由だ。もうそろそろ行動を起こそうと、先週届いた武器の最終確認をしたところだった。

刀を使う時に邪魔にならないような位地に小型リボルバーをセットしたホルスターを二丁提げる。ポケットにはローダーと銃弾を少量仕舞い、日本刀を手取る。

仕上げに例の薬を一粒胸ポケットに入れ、ホテルを後にした。

「死に神さんよ！ いったい何処にいるんだい？」

身長2メートルもある大男が大口径のリボルバーを二丁手に持つて夜の街を徘徊している。そこへ二色の目の少女が大きな鎌を持って現れた。

「何か御用かしら？」

「はあ？ お前みたいな小娘が死に神だと？ ……笑わせんじゃねえ！」

「嘘かどうかは私の態度でわかりませんか？」

「……………ほう？ それじゃあ今までやられてきた奴らの実力もわかるつてもんだ」

「あまり舐めてかからないほうがいいですよー。私強いですから」

「はははははっ！ お手並み拝見というじゃないか！」

大男はそう言って銃を構える。

「俺のこの銃から逃げられるかな？」

そう言っていきなり銃をぶっ放した。少女はひらりと銃弾をかわす。

「よくかわしたなあ。だが次はそういかない！！」

大男は今度は両手にリボルバーを構え撃ちまくる。少女はその全てをよけている。が、攻撃を仕掛ける様子を全く見せない。

「どうだあ！ 俺様のS&Wモデル500の味はあ！」

ガキンツという音を立て、弾が無くなったことを大男と少女に知らせた。大男は焦る様子もなく弾をまた詰め始めた。

「いいのか？ 俺に黙って弾を詰めさせて。これが最後のチャンスかもしれないぞ？」

「あなたの実力はわかったわ。…………無駄ね」

「ほう、俺の実力の前に何をやっても無駄と悟ったか。それは賢い判断だ。大人しく捕まると言うのなら命を助けてやってもいいぞ」

「あなたが私に何発撃ち込もうとも無駄と私は言いたいよ、このウストラトンカチ！」

「なっ、なんだと!」

「その銃を両手で計十発撃った今でも腕がぴんぴんしてるのわ褒めるけど……やっぱりその銃の強い反動のせいで連射スピードがのろまだし、当てることが出来ないんじゃ、ただゴリラに銃を持たせただけにしか見えないのよ」

「……言わせておけば付け上がりやがって! 許さねえ、殺してやる!」

顔を林檎のように真っ赤にした大男が、銃を乱射し始めた。だが、やはり当たらない。

「ほら、当たらない。私、もうあんたには飽きたから、死んで」

そう少女が言って、大男が銃を撃った直後のがら空きの懷に素早く入り込んだ。

「なっ!!」

「バイバイおじさん」

スバン、という音と共に大男の体は上半身と下半身に別れた。血が辺り一面に一瞬で広がる。

「……っは……っは……俺はまだ……死に……たく……」

そう言い残し、大男は事切れた。

「先に仕掛けてきたのはあなたでしょう。自業自得です」

「全くその通りね」

「!」

さっきまでこの大男に気を取られていたとはいえ、自分に気付かれることもなくこんな近くまで接近されたことに少女は驚いた。そして、

（この人、ただ者じゃない）

と本能でこうも感じ取っていた。

「あなたは?」

「私? 私は柊麗。あなたを勧誘しに来たの」

「一体何に?」

「私の所属している殺し屋集団にね」

「…もし断ったら？」

「力付くになるね。私としては、それはなるべく避けたいんだけど」

「無理ね。まだ私はあなたを信用できないもの」

「なら、しょうがないね」

そう言っつて麗は薬を飲み込んだ。直後、麗の雰囲気agaraと変わる。

「It's a show time! ド派手に行こうぜ! 死に神さんよ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6423b/>

BLOODY ROAD

2010年10月10日04時26分発行